

The background features a light gray gradient with several realistic water droplets of various sizes scattered across the surface. In the center, there is a faint, circular logo of a hospital, which is partially obscured by the text. The text is written in a clean, green, sans-serif font.

大分ゆふみ病院の 二十年を振り返る

完成予定図



病院紹介のパンフレット

今秋開院

大分ゆふみ病院



今を生きる

ホスピスケアとは、治癒困難ながん末期の患者さんが最期まで、その人らしく生きていただけるように援助する働き的事了。

大分ゆふみ病院での生活の主役は患者さんご家族です。

私達は、身体的症状・精神的不安などの様々な苦痛へのケアを行います。

私達は、あたたかい人間的ふれあいを大切にします。

私達は、心豊かな暮らしを支えます。

医師・看護婦・医療ソーシャルワーカー・音楽療法士・薬剤師・栄養士ボランティアの方々、求めに応じて宗教家の方がチームを組んで患者さんとご家族を支えます。



ホスピスケアは入院中だけになされるものではありません。

患者さんご家族の希望を尊重し、ご自宅での生活も支援します。

また必要に応じて医療ソーシャルワーカーと相談しながら他医療機関との連携も致します。



大分ゆふみ病院（完成予想図）

建設地が更地になりました(2001年5月の模様)



起工式の模様



マスコミにも紹介されました

H13
5/13
大分合同新聞

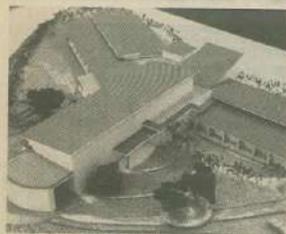
今年一月、県内のホスピス(大分ゆふみ病院)が大分市に誕生する。ホスピスは「検査・診断・治療・延命」といった従来の病院機能に対し、症状の進行したがん患者への激しい痛みや精神的苦しみ、不安を少しでも緩和しようとする専門施設。

本来、治療を目的とした病院では、治療を望めなくなった患者への対応が必ずしも十分ではなく、一般病棟や在宅末期患者らを見とった県内の医療従事者が、一年ほど前からホスピス開設に向け準備を進めてきた。

がんなどの末期患者への対応は、医師と患者間のインフォームドコンセント(十分な説明と同意)、ターミナルケア(終末医療)を中心にランタナなどで認められている安楽死といった問題が論議され始めてきた。これは人間としての尊厳を最後手失わず安らかな死を迎えたいという切実な願いから発しているものと見て、

共同通信の連載企画「われあいの停車場」の中から患者や家族、医師らの探

論説



大分ゆふみ病院の完成模型

刻な眠えを二例引用する。

横浜市在住の松本祐三さん(68)の妻、愛子さんががん再発した。ただちに抗がん剤治療が始まる。すさまじい副作用だった。髪は抜けるし、吐き気はひどいし、ガリガリにやせてしまった。一年以上も苦しい治療に耐え、もう限界に近かった。

祐三さんは息を吐いた。「君は苦し

安らかな死

大分に初のホスピス

んを長く生きると、短くても人間らしく生きるのとどちらがいいのと同じ。愛子さんは、私は人間らしく生きてたい。とキッパリ。愛子さんは自宅で洗剤を付けた後、横断のホスピス病棟に入院。がん治療を始め、鎮痛治療に切り替えたため痛みはなくなり、時折、笑顔をみせた。

入院から二カ月余り後、静かに息を引きました。「妻はがんが苦しみ、私も最後の四十日間、人の愛に包まれて死ねて幸せだった。そして、祐三さんは振り返る。

わが国の終末期医療の現状と、愛子さんの死を振り返る。現代病棟医療は技術偏重、臓器ばかりに目を立、肝心の人間を見ていない。患者へのケアとサポート、つまり介護と福祉が欠けている。患者としての痛報はあくまで患者のものなのに、がん告知もインフォームドコンセントも引か

去るまで徹底していない。ホスピスには由布岳をのぞむ。医師や看護婦のほか医療、ルワーカ、薬剤師、栄養士、法士らがチームとなって介護する。患者家族の宿泊施設も、病棟に就く佐藤俊介医師、院長が院長を全うしていった。

的ケアを尽くしたい。患者家族も大事な仕事だ。スタッフがなって取り組んでほしい」と見せる。

経営的に厳しい面もあり、ホスピスにはボランティアの協力。同病院では古くからボランティアを募集することにして、工士や美容師らの応募も期待

ホスピス開設に先駆け、昨年大分県民病院が開設された。

患者・家族の心もいやしたい



県内初ホスピス開設へ

県内で初めて末期がん患者のケアを専門に行う「緩和ケア病棟」(ホスピス)が今秋、大分市に開設される。がんは国内の死因の1位だが、九州では大分県だけがホスピスがなかった。体の治療だけではなく、患者の心を、そして家族の心をもいやしたいの思いからだ。現在、医師、看護婦ら6人が準備にあたりつつある。

11月「在宅ケアと連携」

ホスピス「大分ゆふみ病院」は、大分市の医療法人明和会が11月に同市金谷迫に開設予定。完全独立型で24床。鉄筋2階建て、延べ面積約1700平方メートル。1室は16から18平方メートル。家族が宿泊できる「家族室」や患者が家族の手作りの食事を食べられるよう「ファミリールキッチン」などを備える。建設予定地から、由布岳が見えることから「ゆふみ」とした。

開設に携わる佐藤俊介医師(47)は「今の病院はなおすことが目的になっているため、積極的な治療に効果が見込めなくなってきた時、患者さんが安らいで療養できる環境がなく、病院に居られなくなってしまう」との思いから参加。病院の態勢が整えば在宅ケア支援も始める考えで、「在宅ケアとホスピスを連携させていきたい」と言う。

ホスピスでは、入院患者1・5人に看護婦は1人以上が必要と国が定めている。同病院では医

大分ゆふみ病院の完成予想模型

柱が立ち始めました(2001年7月の模様)



病院の形が出来始めています(2001年8月の模様)



内装工事も進んできました(2001年10月の模様)



2001. 10月中旬
2号 南院前のNs. 50A

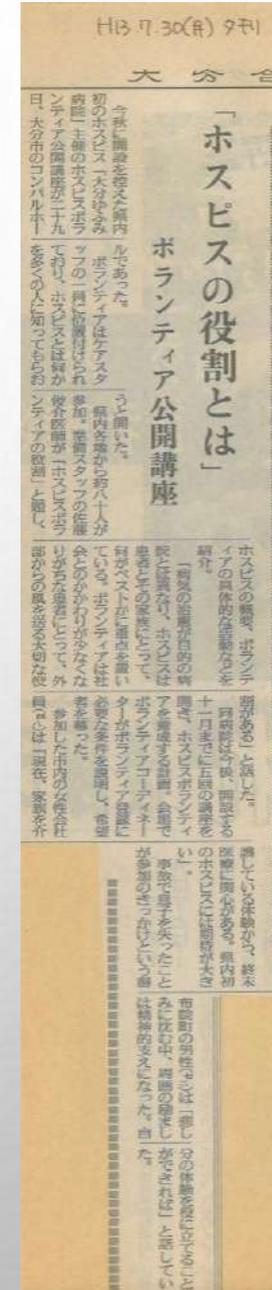


2001. 10月中旬
南院前・事務室・暖炉

開院前にスタッフ研修会が開かれました (2001年10月1日の模様)



初代ボランティアの方々 (2001年10月20日の模様)



開院前日に開院式が行われました (2001年10月31日の模様)

2001. 10. 31
当院 開院式!!



2001. 10. 31
開院 記念 会食!



ホスピス・緩和ケアフォーラムが開催されました (2003年1月19日の模様)



ホスピスの理解深めて 大分市で来月 フォーラム

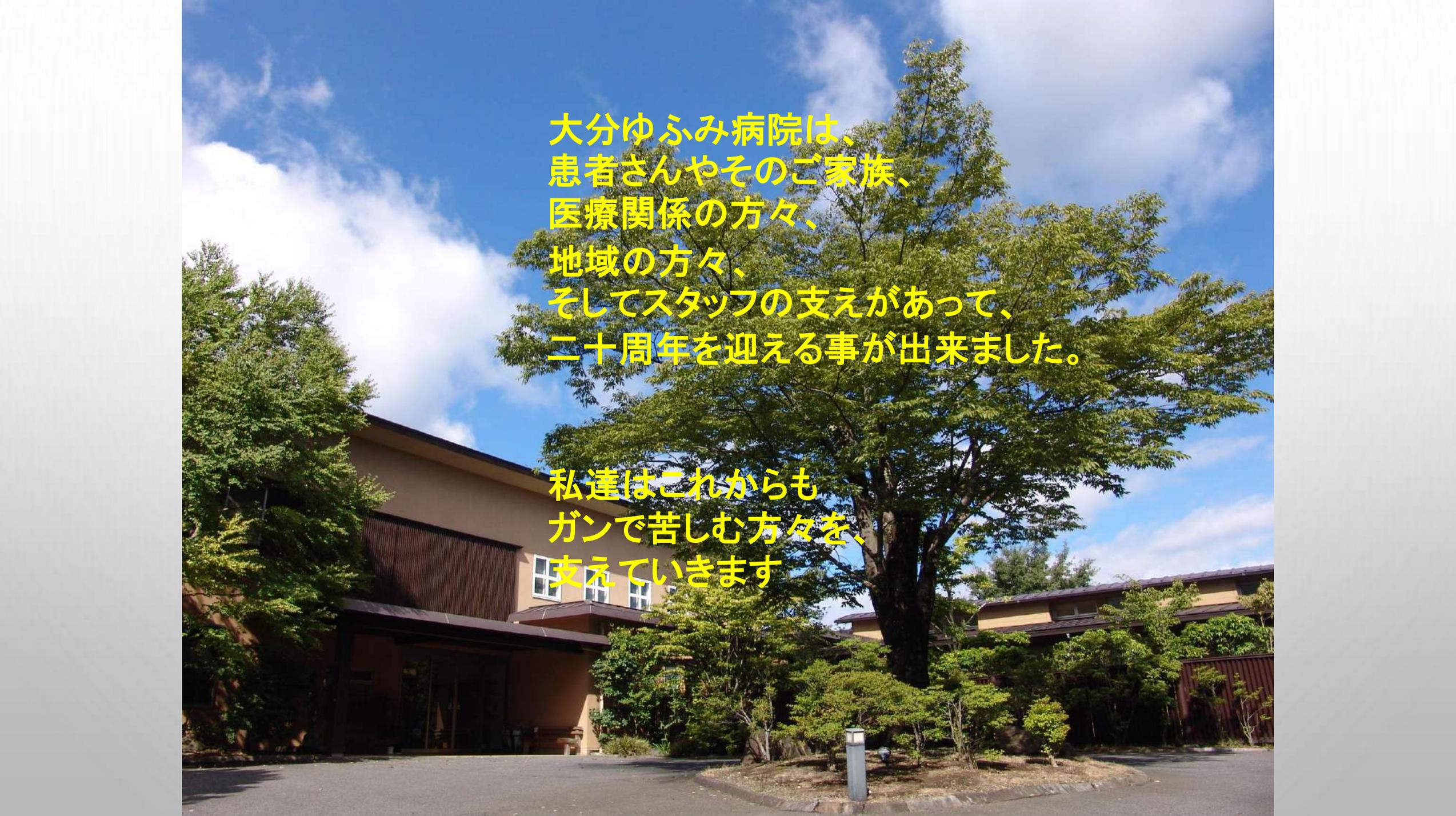
末期患者らのケアをするホスピスについての理解を深めてもらおうと、「ホスピス・緩和ケアフォーラム in おおいた」が、来年1月19日午後1時から、大分市高砂町の県立総合文化センター・グランシアタで開催される。日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団の主催。

日本のホスピスの草分け的存在、淀川キリスト教病院（大阪市）の池永昌之ホスピス長と、昨年在宅ケアで胃がんの妻をみとった放送タレントの永六輔さんの講演や、「ホスピスってなあに？」と題したパネルディスカッションなどがあ

参加は無料だが、整理券が必要。申し込みは、はがきかファクスで、〒870-0879 大分市金谷迫3-13の1、大分ゆふみ病院内 フォーラム事務局（FAX 097-548-7273）へ。参加者全員の住所、氏名、電話番号と、ホスピス

日本医療機能評価機構の認定を受けました (2003年12月15日)



A photograph of a hospital building with a large, leafy tree in the foreground. The sky is blue with scattered white clouds. The building has a brown facade and a dark roof. The tree is the central focus, with its branches spreading across the upper half of the frame.

大分ゆふみ病院は、
患者さんやそのご家族、
医療関係の方々、
地域の方々、
そしてスタッフの支えがあって、
二十周年を迎える事が出来ました。

私達はこれからも
ガンで苦しむ方々を、
支えていきます